

信州大学知の森基金を活用したグローバル人材育成のための短期学生海外派遣プログラム
実施状況および成果

プログラム名	農業・食糧分野における国際協力で活躍出来る グローバル人材の育成	
学部・研究科名	農学部	
実施期間	2016年8月31日～9月11日	
研修先(国・都市・施設名)	ネパール	
参加者数：9名		知の森基金からの支援者：3名
プログラム概要	農学部在学中に身につけた専門知識と技術を海外(主に途上国)の現場において、どのように活かすことが出来るのか。今、世界でおこっている農業問題・食糧問題は、どのような農業環境と社会的構造の中で生じているのか。その問題の本質は何なのか。本プログラムは、信州大学農学部と学術交流協定を結んでいるネパール国農業省ネパール農業研究評議会の研究施設(首都カトマンズ標高1350m)と標高2650mのヒマラヤの麓の村マルファを中心に実施する。ネパールという農業生物多様性の宝庫でありながら、脆弱な食糧生産体制のもとに人々が暮らす「開発途上国」において、約2週間の研修先での活動とその経験から、このような問いに対して、自身で考え、学ぶための機会を提供し、将来、国際協力分野で活躍するグローバル人材の育成を目指す。	

実施状況・成果

本ネパール海外農業実習は、今年で4回目を迎えた。参加学生は9名で、2年生3名、3年生6名だった(男子5名、女子4名)。今回の実習では、まず、カトマンズ近郊のバクタールで有機農業を行う農家を訪問し、そこで農法を指導する青年海外協力隊の隊員から説明を受け、ネパールにおける有機農業の実態について学んだ。バクタールは、昨年4月の大地震で大きな被害を受けた場所の一つで、被災した農家から当時の様子を聞くとともに、復興に向けた取り組みについて話を聞いた。次に、交流協定を結んでいるムスタン郡のマルファ村を訪問した。

マルファ村は標高2650mの山岳地帯にある農村で、ソバとオオムギの2毛作を基本とした農業とリンゴを中心とした果樹栽培を行っている。学生たちは、リンゴがジュースやジャム、ブランデーに加工される様子を視察するなど、村の農業について理解を深め、村人と交流した。また、今回は、マルファ村近隣のコバン村を訪問し、村にあるコバン農業高校を視察し、学校関係者から学校の様子を聞くとともに、そこで学ぶ生徒たちとも交流をした。

その後、インド国境近くのチトワン(標高150m)へ移動し、山岳地帯とは全く異なる植生や栽培されている作物、民族等を体感し、様々な農業生態系のもとで行われるネパールの農業について学んだ。また、チトワンでは、国立公園内をゾウに乗って周遊するツアーにも参加した。カトマンズに戻ってからは、毎年行っている野菜市場やスーパーマーケットで売られている野菜の調査を行ない、日本では見かけない野菜や食べ物についての新たな知見を深め、それらの価格と日本との違いについても学んだ。

今回の実習では、標高の異なる地域の農業生態系の違い、すなわちその地域の植生や栽培されている作物の違い、そして食文化やそこに住む民族の違いを実体験を通じて学ぶことができた。

学生の声①ー農学部 学生

今回の実習が私の初海外経験であった。それぞれの場所で環境だけでなく人柄も違うことに気がついた。また、これらの環境は日本とも違っていた。自分の専門は農村開発であり、特に発展途上国を対象としている。研究自体はこれから始まるのだが、その前にこのような経験ができたことはモチベーションの向上になった。今回の体験はすべて有意義なものであり、このプログラムに参加できたことに感謝している。

学生の声①ー農学部 学生

ネパールの農業の現状や課題を知ることができました。想像以上に豊富な種類の作物が栽培されており、特定の作物と一緒に栽培することで虫除けの役目を果たしていること等を知りました。自分にとって4回目の海外経験でしたが、新しい発見がたくさんありました。事前に話を聞いたり、本を読んで想像していたネパールとは違った側面もあり、実際に訪れなければわからなかった、現地の方の温かさやネパールの良さに触れることができました。同じアジア圏でありながら、日本との違いは大きく、またとない経験をすることができました。

ネパールの子供たちと談笑中



マルファ村の入り口で

